

大戦／文学—フランス文学研究における第一次世界大戦

久保昭博

昨年2014年は第一次世界大戦（以下「大戦」と略記）開戦から数えて100年。フランスでは国を挙げて行われた大きなコメモレートの機運のなか、ここ数年は現役の作家たちにとっても大戦を書くことがちょっとした流行となっているばかりか（ジャン・エシュノーズ、ピエール・ルメートル等々）、文学研究においても大戦がアクチュアルなテーマとして浮上している。文学研究情報サイトFabulaを検索すれば、「*Grande Guerre*」を冠した数々のシンポジウム情報が掲載されていることを確認できるし、新刊カタログなどをみれば、戦争文学再刊の案内や、これまで未発表であった日記や書簡など、作家たちが戦争の時代をどのように生きたかを明らかにする新資料の刊行情報に接することもまれではない。とはいえ歴史学における大戦研究の厚みに比べると、文学研究者はこれまで大戦という出来事に十分な注意を払ってこなかったと言わざるを得ず、大戦と文学の関係を総合的に捉えようとする試みはまだ始まったばかりであるといっても過言ではない。そこで本稿では、後述する「戦争文化」論以降ひろがりを見せつつある現在の研究動向を把握するためにも、大戦がこれまで文学研究・批評の言説においてどのように扱われてきたのかを振り返ってみたい。

1) 戦中から戦後にかけてのアンソロジー

大戦は、それまでの戦争とは比べものにならないほど、戦争に関する「書き物」を大量に出現させた戦争であった。戦争が長期にわたったことはもちろんその大きな要因であるが、他にも戦争報道や戦争文学の需要が前線においても銃後の市民社会においても高かったことや（これらの戦争表象はしばしば精神的動員と結びついた）、さらには第三共和政下の初等教育拡充政策によって識字率が高まっていたために（世紀転換期で95%）、戦闘に従事した当事者のほとんどが、自らの経験を書く能力を備えていたことも忘れてはならない。こうした状況を受け、戦中から戦後にかけて、戦争文学や戦闘員作家のテキストを収めたアンソロジーが発表された。これらのなかには、戦争という出来事を「叙事詩」と

形容した国威発揚の意図も明らかな詩集¹、逆にロマン・ロランが序文を寄せて反戦を掲げた詩集²、あるいは戦闘員作家協会によって発行された、有名無名を問わず戦場で命を落とした732人の「作家」のアンソロジーなどがある³。この最後のものは全5巻にわたる巨大な企画であり、あたかも戦死者を作家として聖別するために作られた「墓標」のような書物だ。これらがいずれも戦争という状況に深く根ざし、政治的な意味合いを強く帯びた書物であることは言うまでもないが、しかし同時に戦争文学を対象化し、一定のペース・パティヴに従って整理したという意味では、研究の出発点であると言えなくもない⁴。

こうしたアンソロジーのなかで特筆すべきは、ジャン・ノルトン・クリュの『証言者たち』である⁵。1929年に出版されたこの著作（251人の作家の300点にのぼる著作を検討した大著）には、戦争という出来事が歴史になりつつあるという視点がすでに芽生えている。自らも従軍したノルトン・クリュは、戦場の「真実」を明らかにして将来の歴史に資するという使命感とともにこの計画に取りかかり、兵士によって執筆された記録―手紙、日記、回想録、そして実録的戦争小説など―を同列に並べ置き、それぞれの証言としての真正さを判断した。バルビュスらすでに名声を得ていた作家たちを手厳しく非難したことで出版当時物議をかもしたこの書物は、その後ながらく大戦研究者以外の人々には忘れられていたものの、証言と歴史叙述の関係を、さらに我々の関心により近いところでは、文学は真実に触れ得るかという問題―ノルトン・クリュは文学的伝統を戦争の真実をゆがめる虚偽として告発している―を鋭く問うた著作として、近年ふたたび注目を集めている⁶。

¹ Ernest Prévost et Charles Dornier (éd.), *Le Livre épique – Anthologie des poèmes de la Grande Guerre*, Librairie Chapelot, 1920.

² *Les Poètes contre la guerre*, Éditions du Sablier, 1920.

³ L'Association des écrivains combattants, *Anthologie des écrivains morts à la guerre 1914-1918*, Edgar Malfère, 5 vol., 1924-1926.

⁴ 1914年から1916年までの戦争関連文献を網羅的に集めたジャン・ヴィックの書誌『戦争文献』（Jean Vic, *La Littérature de Guerre*, Payot, 1918）によれば、戦争と文学の関係を論じた書物として、戦時中に以下の著作が発行されているとのことである。

Paul Adam, *La Littérature et la guerre*, G. Crès, 1916.

Le Théâtre pendant la guerre, notices et documents publiés par Ad. Aderer et al., Publication de la Société de l'histoire du théâtre, 1916.

なおジョルジュ・デュアメルは1920年に『戦争と文学』と題した書物を刊行し（もともとは講演）、戦時中の戦争文学流行という現象を批判した（Georges Duhamel, *Guerre et littérature*, A. Monnier, 1920.）。

⁵ Jean Norton Cru, *Témoins*, Presses Universitaires de Nancy, 2006 (1929).

⁶ 『証言者たち』をめぐる論争とその現代的意義については以下の著作を参照。Frédéric Rousseau, *Le Procès des témoins de la Grande Guerre*, Seuil, 2003.

2) 1970年代の二つの研究

多分に論争的、イデオロギー的であることを免れなかった戦争直後の議論の後、大戦を主題とする戦争文学が客観的かつ包括的に論じられるようになったのは、ようやく1970年代になってからのことである⁷。この時期には二つの重要な著作がともにクリンクシーク社から刊行された。ひとつはモーリス・リュノーの『1919年から1939年にかけてのフランス小説における戦争と革命』⁸、もうひとつはレオン・リージェルの博士論文『戦争と文学—大戦に着想を得た小説にみられる意識の動転（フランス文学、アングロサクソン文学、ドイツ文学）』である⁹。大戦直後の著作群とは異なり、第二次世界大戦を経て書かれたリュノーの著作に認められるのは、明確な歴史意識である。彼は戦闘員作家による実録小説からマルタン・デュ・ガールらの歴史小説にいたる数多くの小説を検討し、大戦が文学作品のなかでどのように歴史化されたかを跡づけながら、1929年から1933年の間に「戦後から戦前へ」という意識の転換が生じたと論じた。また「動員解除の文学（la littérature de démobilisation）」というカテゴリーを立て、そのなかでラディゲやブルーストなど、銃後にいながら戦争を敏感に感じ取っていた作家、より正確には、市民社会に浸透した戦争を敏感に感じ取っていた作家に着目したことも彼の功績とみなせるだろう。

他方、リージェルの著作は、その副題が示しているように比較文学的なアプローチをとっている点に最大の特徴がある。塹壕で極限状態に置かれた人間が示す反応には、国籍を超えて共通したものがある。リージェルは、実録的戦争文学にしばしば描写された兵士の経験の共通性を確認した上で、それらが戦後に仏、独、英米それぞれの文化的・政治的文脈でどのように解釈され、独自の意識を形成してゆくかを追った。また彼はリュノーと

⁷ ただし1963年には、ルネ・ポモーによる先駆的な論文が発表された（René Pomeau, « Guerre et Roman dans l'entre-deux-guerres », *Revue des Sciences Humaines*, janvier-mars, 1963, pp. 77-95.）。また、アンドレ・デュカスら三人の高等師範学校卒業生によって書かれた『フランス人の生と死、1914年～1918年』（1962年）の付録として「戦争と作家」ならびに「戦争と芸術家」というテキストが収められている（André Ducasse, Jacques Meyer, Gabriel Perreux, *Vie et mort des Français 1914-1918*, Hachette, 1962.）。ただしこれは分析というよりも作家や作品の列举に近い。

⁸ Maurice Rieuneau, *Guerre et révolution dans le roman français de 1919 à 1939*, Klincksieck, 1974.

⁹ Léon Riegel, *Guerre et littérature – Le bouleversement des consciences dans la littérature romanesque inspirée par la Grande Guerre (littératures française, anglo-saxonne et allemande) 1919-1930*, Klincksieck, 1978.

異なり、「戦前」を大きく取り上げ、いわゆる大衆小説をも考察の対象としながら、主要交戦国それぞれにおける国民感情とナショナリズムの比較を行っている。

3) 個別研究のなかの大戦

大戦直後の戦争文学論以降、リュノーやリージェルの著作を除けば、大戦ないし戦争文学を正面切って論じた文学研究は、1990年代にいたるまでほとんど認められない。とはいえそれは、文学研究者が大戦を無視したということを必ずしも意味するわけではない。大戦は、戦争によって決定的な刻印を押された作家の伝記や芸術運動のモノグラフィーのなかに存在している。これらの著作が大戦を扱う角度や深度はもちろん様々であるが、そのなかには、たとえばマルグリット・ボネによるアンドレ・ブルトン伝¹⁰や、フレデリック・ヴィトウーのセリーヌ伝¹¹などのように、ひとりの特異な人物の視覚を通してでなければ浮かび上がってこなかったであろう大戦の様相を捉えた仕事もある。

4) 「戦争文化」論—1990年代の転回

大戦と文学をめぐる研究史は1990年代に新たな局面を迎えるが、その大きな原動力となったのが歴史家たちの仕事である。この時期、従来の外交史、軍事史、そして社会史に加え、文化史的なアプローチから大戦を再検討しようという動きが、ペロンヌにある「大戦歴史博物館 (Historial de la Grande Guerre)」を拠点とする歴史研究者を中心に起こり始めた。彼らは、兵士のみならず女性や子どもらも含めた当時の人々が戦争について抱いた表象の全領域を明らかにするという観点から、文学作品や芸術作品を積極的に取り上げると同時に、「戦争文化 (culture(s) de guerre)」という概念を提唱して、文学・芸術研究者にも大戦と自らの研究領域との関わりを見直す視座を提供したのである¹²。またこれと平行して、知識人がいかに大戦を準備し、またそれに関与したのかを詳細に論じたクリスト

¹⁰ Marguerite Bonnet, *André Breton – Naissance de l'aventure surréaliste*, José Corti, 1975.

¹¹ Frédéric Vitoux, *La Vie de Céline*, B. Grasset, 1988. (邦訳フレデリック・ヴィトウー『セリーヌ伝』、権寧訳、水声社、1997年。)

¹² 「戦争文化」論については、ステファン・オドワン＝ルゾーとアネット・ベッケルによる以下の論文ならびに著書を参照。Stéphane Audoin-Rouzeau, Annette Becker, « Violence et consentement : la « culture de guerre » du premier conflit mondial », in Jean-Pierre Rioux, Jean-François Sirinelli (dir.), *Pour une histoire culturelle*, Seuil, 1997, pp. 251-271.; Stéphane Audoin-Rouzeau, Annette Becker, *14-18, retrouver la Guerre*, Gallimard, 2000.

フ・プロシャッソンとアンヌ・ラスムッセンの著作『祖国の名の下に』が刊行されたことも、大戦と文学者の関わりを見直すきっかけをもたらしただろう¹³。いずれにせよこれ以降、大戦研究のなかで文学（芸術）が重要な位置を占めるようになり¹⁴、たとえばジャン＝ジャック・ベッケル編による論文集『大戦の文化史』にみられるように¹⁵、歴史学者と文学研究者のコラボレーションや、両者の境界を越えるような研究が現れることになる。

「戦争文化」という視点の導入や新たな資料の公刊などによって目につくようになった現象として、新たなタイプの作家研究の登場があげられる。その典型が「戦争文化」論の提唱者のひとりアネット・ベッケルによるアポリネール伝だ。この著書の副題「ある戦争の伝記」にも示されているように、ベッケルが書いたのは、詩人の生涯のうち1914年から1918年の時期と、戦争詩人としてのアポリネールの遺産に焦点を合わせた伝記である¹⁶。またやはり現代史家のジャン＝ピエール・リウーによる、戦場のペギーに特化した伝記も出たばかりだ¹⁷。さらに本年に入って出版されたピエール・デクスの遺著『再発見されたアラゴン』の出版も、これまで曖昧だったアラゴンと戦争の関わりを、新資料に依拠して明らかにした書物として重要である¹⁸。最後にもうひとつ、こちらは作家個人の研究ではないが、ヤエル・ダガンが『新フランス評論（NRF）』誌の戦中戦後にかけての動向を明らかにした著作も「戦争文化」論の成果として忘れずに記しておくべきだろう（ちなみにこの4冊ともタランディエ社から刊行されている）¹⁹。

とはいえこの間もっとも研究が進められた分野は、やはり戦争文学である。主だった研究を挙げよう。リュック・ラッソンは、バルビュス、ロラン、マルタン・デュ・ガールら戦時中から両大戦間期にかけて活躍した作家たちの平和主義文学にふたたび光を当て、戦

¹³ Christophe Prochasson, Anne Rasmussen, *Au nom de la patrie – les intellectuels et la première guerre mondiale*, Éditions de la Découverte, 1996.

¹⁴ 近年発行された大戦事典のなかに「戦争文学」の項目が設けられたことは象徴的である。Cf. Stéphane Audoin-Rouzeau, Jean-Jacques Becker (dir.), *Encyclopédie de la Grande guerre 1914-1918*, Bayard, 2004. この項目の執筆を担当しているのはクリストフ・プロシャッソンである。

¹⁵ Jean-Jacques Becker (dir.), *Histoire culturelle de la Grande guerre*, Armand Colin, 2005. この論集には、カリーヌ・トレヴィザンが現代文学における大戦表象を分析した論文を寄せている。

¹⁶ Annette Becker, *Apollinaire – Une biographie de guerre*, Tallandier, 2009.

¹⁷ Jean-Pierre Rioux, *La Mort du lieutenant Péguy – 5 septembre 1914*, Tallandier, 2014.

¹⁸ Pierre Daix, *Aragon retrouvé 1916-1927*, Tallandier, 2015.

¹⁹ Yaël Dagan, *La NRF entre guerre et paix, 1914-1925*, Tallandier, 2008.

争表象がいかに戦争に対抗しうるかという問いを再検討した²⁰。ペロンヌ派の歴史学者ニコラ・ボープレは、戦中から戦争直後にかけてのフランスとドイツにおける戦争文学とそれらの戦争表象を比較的に分析して、戦争文学が精神的動員に果たした役割や、検閲の問題、そして戦争文学の受容や復員作家の置かれた地位など、当時の社会的文脈のなかに「戦争を書く」という営みを位置づけようとした²¹。またカリーヌ・トレヴィザンは「戦争文化」論によって提起された喪と記憶の問題に応答し、死とそのエクリチュールというテーマを通じて、大戦文学の重要なトポスとなった「復員兵の沈黙」、すなわち表象不可能な経験をいかに表象するかという戦争文学のアポリアに向き合った²²。さらに大戦を他の戦争の表象と比較する、よりいっそう文学（史）的な試みもある。それが古典文学と近代文学を対比させつつ戦争文学というジャンルの詩学を明らかにしようとしたジャン・ケンプフェルの著作であり、彼はこのなかで第一次世界大戦戦争文学にも多くの頁を割いて、テーマとレトリックという観点からこの戦争の表象を分析している²³。

2009年から2010年にかけては、クラシック・ガルニエ叢書から、小説と詩それぞれのジャンルについて概説的なタイトルを冠した著作が出版されている。このうち小説（『大戦のフィクション』）の方は、イロニーについての著作があるピエール・スクーンティウスによるもので、戦時中に出版されたものから現代作家の作品までを射程に入れ、大戦戦争文学を特徴づける諸々のテーマを明らかにしたものである²⁴。他方『大戦の詩人』と題された詩の研究は、2013年にアポリネールについての記念碑的な伝記²⁵を出版したロランス・カンパによるものだ。ルパート・ブルックやシーグフリード・サスーンら戦争詩人が名を残したイギリス文学と異なり、フランス文学においては、アポリネールやサンドラールの例外的なケースを除けば、戦争文学は質量ともに散文（小説）が圧倒している。彼女の研究は、これまでまとめたかたちでは論じられていなかったフランスの戦争詩を掘り

²⁰ Luc Rassin, *Écrire contre la guerre : littérature et pacifismes 1916-1938*, L'Harmattan, 1997.

²¹ Nicolas Beaupré, *Écrire en guerre, écrire la guerre – France, Allemagne 1914-1920*, CNRS Éditions, 2006.

²² Carine Trévisan, *Les Fables du deuil – La Grande guerre : mort et écriture*, P.U.F., 2001.

²³ Jean Kaempfer, *Poétique du récit de guerre*, José Corti, 1998.

²⁴ Pierre Schoentjes, *Fictions de la Grande Guerre – Variations littéraires sur 14-18*, Classique Garnier, 2009.

²⁵ Laurence Campa, *Guillaume Apollinaire*, Gallimard, 2013.

起こし、忘れられた詩人の（再）発見―彼女はルイ・クレメールという無名詩人に一章を捧げている―を可能にした²⁶。

開戦100周年を契機として、戦争文学はこれからもさまざまなアプローチで研究されるだろう。最新の成果として、2014年の出版物をふたつ挙げておく。ひとつはアントワヌ・コンパニョンの編纂による戦争文学アンソロジー『作家たちの大戦』²⁷。ヨーロッパの作家のみならずセネガルの仏語系作家バカリ・ジャロのテキスト、そしてコレットやロシアの詩人アンナ・アフマートヴァといった女性作家のテキストも収めたこのアンソロジーには、ヨーロッパ世界外への波及や銃後の文化状況も含め、大戦の影響を総合的に捉えようとする近年の研究傾向が tydよく反映している。もうひとつは、フランス一般比較文学協会（Société Française de Littérature Générale et Comparée）が発行した論集『大戦のエクリチュール』²⁸。ボープレやスクーンティウスも寄稿しているこの論集は、発行元からも理解されるように比較文学的アプローチを特徴とし、カール・クラウスやイギリスのモダニズムについての論文も収められている（巻末に付けられた英独仏語文献の書誌情報も有用）。

5) 日本における研究動向

最後に日本における研究動向を紹介しておこう。そもそも第二次世界大戦に比べ、第一次世界大戦にたいする注目の度合いが圧倒的に低かった日本においては、歴史学においても大戦研究の蓄積は少なかった。この空白をかなりの程度埋め、日本の大戦研究の拠点となったのが京都大学人文科学研究所のプロジェクト「第一次世界大戦の総合的研究」（2007年～2014年）である。このプロジェクトのひとつの特色は、大戦が人間の生全体に与えた変化を理解するという観点から、文学・芸術研究を主要な軸のひとつと位置づけ、多くの文学・芸術研究者の参加を得たという点である。もちろん、フランス文学研究の側から大戦に迫った仕事はこれまで日本になかったわけではない。たとえば有田英也のドリ

²⁶ Laurence Campa, *Poètes de la Grande Guerre – Expérience combattante et activité poétique*, Classique Garnier, 2010.

²⁷ Antoine Compagnon (éd.), *La Grande Guerre des écrivains – D'Apollinaire à Zweig*, Gallimard, 2014.

²⁸ Joëlle Prunghaud (éd.), *Écritures de la Grande Guerre*, SFLGC, 2014.

ユ・ラ・ロシエル論²⁹、そして坂本浩也や小黒昌文のプルースト論³⁰などで、大戦の意味ないしその文学との関係は掘り下げて論じられていたし、フランス知識人の大戦への関わりとその影響をコンパクトに概観した桜井哲夫の著書もある³¹。とはいえ筆者を含めこのプロジェクトに参加したフランス文学・思想研究者が、音楽学研究者や美術史研究者など他の芸術分野の研究者、そしてもちろん歴史学者らとの対話を通じて得た学際的成果は、独自のものとみなせるだろう。

このプロジェクトの成果のなかからフランス文学・思想に関するものを発表順に挙げておく。まず久保昭博『表象の傷』は、これまで軽視されがちだった1914年から1918年の文学状況に光をあてつつ、「戦争文化」論を援用して、大戦と文学の関わりを概観しようと試みた著作である³²。次に全4巻を数える論文集『現代の起点—第一次世界大戦』のうち、「精神の変容」を主題にした第3巻。ここにはアヴァンギャルドを扱った久保論文、プルースト『見出された時』を分析した小黒昌文の論文、歴史家マルク・ブロックの戦争体験とその後の学問的軌跡を跡づけた王寺賢太の論文、ヴァレリーの「精神の危機」を出発点として、大戦後にひろがったヨーロッパの危機意識を論じた森本淳生の論文と、合計して四本のフランス文学・思想関連の論文が収められている³³。最後に雑誌『思想』2014年10月特集号「100年後の第一次世界大戦—現代の起点」に収められたアネット・ベッケルの論文³⁴。これは同年1月に京都大学で開催されたシンポジウムの記録である。

これらの著作ないし論考が、ただひとつの方向を向いているわけではないことは言うまでもない。ただし、フランス文学研究者に限らず複数の参加者によって共有された問題意識として、「戦争文化」論が陥りがちな盲点、すなわち、文学・芸術史の固有性—自律性という近代芸術の理念に由来する固有性—を文化史に還元してしまうという陥穽をいかに

²⁹ 有田英也『政治的ロマン主義の運命—ドリュ・ラ・ロシエルとフランス・ファシズム』、名古屋大学出版会、2003年。

³⁰ 小黒昌文『プルースト—芸術と土地』、名古屋大学出版会、2009年。坂本浩也の業績については後述。

³¹ 桜井哲夫『戦争の世紀—第一次世界大戦と精神の危機』、平凡社新書、1999年。

³² 久保昭博『表象の傷—第一次世界大戦からみたフランス文学史』、人文書院、2011年。

³³ 山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『現代の起点—第一次世界大戦』（第3巻、精神の変容）、岩波書店、2014年。

³⁴ アネット・ベッケル「作家と芸術家の大戦—言葉とイメージによる悲劇の表象」、『思想』、2014年10月号、pp. 94-116。久保による解題と岡田暁生によるコメント付。

逃れるかという議論があったことは記しておきたい。「戦争文化」論をより実り多いものとするためにも、文学研究と歴史研究の齟齬を（再）確認し、〈大戦文学〉研究を〈大戦／文学〉研究へと展開することが現在では求められているのではないだろうか。

なお本稿執筆中に、坂本浩也による『プルーストの黙示録』を受け取った³⁵。数年におよぶ研究をまとめた本書は、「戦争文化」論を援用し、大戦に焦点を合わせた作家研究の新たな流れに棹さす一冊と言えるだろう。ただし本書の最大の特徴は、プルーストのテキストを「読む」ことで、この銃後の作家が作家生命を賭した文学の自律性と戦争という状況のせめぎ合いを明らかにしたことにある。

（関西学院大学准教授）

³⁵ 坂本浩也『プルーストの黙示録―『失われた時を求めて』と第一次世界大戦』、慶應義塾大学出版会、2015年。